ナイル河リバーフロントの謎

㈶地方公務員等ライフプラン協会監事（前当センター理事）　長谷川憲治

砂漠のメルヘン

♪月の砂漠をはるばると…旅のラクダが…この歌が好きだ。童謡・唱歌のたぐいだから飲み屋のカラオケにはない。が、金の鞍の王子様、銀の鞍の王女様がセピア色いっぱいの砂漠に淡い影を映すイメージがいい。

だがこれに憧れてエジプトへ出掛けたわけではない。広い砂漠に一筋ながれて５千年の歴史を育てたナイルの、世界最長を誇る河川を一目眺めるおがみたい、前回はブラジルのアマゾン、密林の緑をわけて泡立ち盛り上がって流れる流域面積世界最大の大河だったが、この二つを見くらべたい肌に感じたい、それが今回の旅行の目的だ。

早朝、カイロからナイルの上流アスワン・ハイ・ダムに飛ぶ。季節は砂嵐のない１月下旬というのに大気はやはり細かい砂を一杯に含んで、上空は薄く靄がかかっている。この状態は一年を通ずるという。カイロの街は、建物はもちろん街路樹も路面も一面に赤茶けた細かい砂に覆われ、車が走れば舞い上がる砂埃が一瞬眼を閉じさせる。年間降雨量は21ミリという。飛行機は砂の白い靄を駆け抜けて上昇し南にひたすら進む。これがワジ（涸谷）というものか、盛り上がる大小の砂の山裾に涸れた水の流れの跡が曲がりくねって巨大な龍を描いている。砂漠も時には雨が局地的に集中して降ることがあって、一瞬の豪雨も忽ちに砂漠に吸い込まれて尻なし川になりワジはその名残りである。

こうして上空から眺めれば実感がわくのだが、ナイルは支流というものを持たない。いや、正確には、エジプトの上流スーダンでアトバラ川が流れ込み、さらに上流で青ナイルが合流するが、アスワンから地中海に至るエジプト国内の約880キロには支流は全くない。だから蒸発と農業用水に引かれてナイルは流れにつれて水量は減少し先細って行くという面白い川である。

いや、川はみな面白い。かってアラスカのアンカレッジでは極北の白い雪原を流れるユーコン河の巨大な蛇行を見下ろして息を飲み、ブラジルでは熱帯の黯いとも見える密林を蜒蜿とうねくるアマゾン河に見惚れた。そもそも川はなぜ蛇行するのか。右へ進んだ流れは必ずなぜか左に向きを変える。曲がり過ぎて元の流れにぶつかりそうになると慌て翻えって反転する。「とにかくワシは気ままに生きるゾ」とゴネて、「君子たるものは間道(近道)しないゾ」と背筋をのばし、「直線なぞはうさん臭いものである、自然界には存在しないものだゾ」と腕白豪気なところが面白いのだ。

ナイル河の暮景

ナイルのリバーフロント

カイロからアスワンへの眺めは、どこまでも広がる灼熱赤茶色の砂漠と鈍く光る一筋のナイルだけだ。右岸は砂の波かなたに白く輝く山々が連なり、左岸は世界最大のサワラ砂漠、ただ茫漠として果てしない。見下ろすと誠によく理解できるのだが、ナイルの流れは、いわゆる掘込みの河道である。誤解をおそれず単純化して言えば、アスワンからカイロまでの川筋は掘込河道一本である。総ての生命を拒絶した極限の乾燥地帯を太古からの流れが掘り込んで形成した河道である。そして、その河道の高水敷に集落が点在し農地が広がり、道路と鉄道が通じている。水は低水路をゆったりと右に左に流れてすべての生命を育む。ここではリバーフロントは堤内でなくて堤外の高水敷を指す言葉である。流路を固定して堤内と堤外を区切るのが堤防だとすれば、ここには人が築いた堤防はない。ならば低水路の護岸はどうかというと、３泊４日の船旅、ナイル・クルーズはアスワンからルクソールまでだが、この間、船着場の市街地周辺にお粗末な工事が僅かに見られただけ。どうも河川工事屋さんは失業しているらしい。

ついでだが、このナイル・クルーズ、昼は砂埃の遺跡神殿などを勉強するのでツアーの女性たちは日避けの麦藁帽子にジーパン姿だ。が、夜のディナーともなると高級豪華客船の食堂に上から下まで満艦飾のキンキラ、隣のおばさんがたちまち貴婦人に化けて出る。なに、中身は変わりようがない、毎晩の衣装の変化は旅行カバンの大小に比例するだけと心得ればよいこと。

繰り返すが、アスワンからカイロまでのナイルの川筋は掘込河道である。屈曲は高水敷の内部に限られる。そして、カイロあたりで掘込河道が終わって平地を流れるようになる。だからカイロを過ぎると左右に派川が流れてデルタ地帯を構成している。アスワンにダムが完成してからは、全くの自然の洪水はエジプトには起きていない。以前は夏季がナイルの洪水期だった。本流である白ナイルの流域の雨季は9～11月と3～5月だが、途中の大湿地帯で調整されて下流の水量に大きな影響を与えない。洪水氾濫の元凶は青ナイルである。青ナイルの水源はエチオピアのタナ湖の付近で、雨量は6～9月にかけて印度洋に発生するモンスーンに左右される。カイロには2カ月半ほど遅れて影響があらわれ、通常は9月がここの洪水期に当たる。したがって、ハイ・ダムが佐久間ダムの5百倍という貯水量のナセル湖を形成するまではナイルは毎年この頃に洪水氾濫が発生していたのである。

では、その氾濫の状況はどうだったかというと、「ナイルが国土に氾濫すると、水上に現れているのは町々だけとなり、その様はエーゲ海に浮かぶ島嶼さながらである。すわちエジプトの全土は大海と化し、町々だけが水上に現れているのである」とヘロドトス（紀元前5世紀ギリシヤの著名な史家、「歴史の父」と呼ばれる）は述べている。が、この氾濫は、注意しなければならないのは、カイロあたりから上流は高水敷のなかでの氾濫であり、カイロから下流はデルタ地帯だから、ここでは時に右に流れ左にまた振れたりしながら奔放無慈悲に地中海へ注いでいたのである。

デルタの始まりの位置はカイロあたりと先に述べた。が、もう少し正確に言うと、カイロの西南13キロ、車で30分ほどにあるギザ地区のピラミッドやスフィンクスのあたりが、かつての喉首だったかもしれない。ヘロドトスは「エジプトはナイルの賜物」という有名な言葉を残している。この「エジプト」とはカイロの北に広がるデルタ地帯を指すとされる。そして、この「賜物」のデルタは、毎年のやさしい洪水と、おそらく何十年か何百年に一回かは、潰滅的な大氾濫に見舞われたに相違ない。やさしい洪水は農地を灌漑して肥料をもたらし、砂漠の乾燥が析出する地表塩分を洗い流す神の恵みである。が、大氾濫が人々の営みを根こそぎ奪うことは今も昔も変わりない。

エジプトの古代文明はBC.6千年からとされ、黄河文明(BC.2千2百年)、インダス文明（BC.2千5百年)、メソポタミア文明(BC.6千年)とともに古代文明の発祥の地としてよく知られている。いずれも大河のほとりリバーフロントがその曙の地であることから、河川と文明のかかわりに関する幾多の説がある。しかし地球上にはミシシッピ、アマゾン、揚子江など、ナイルや黄河に劣らぬ大河が多い。大河のリバーフロントが必ずしも古代文明の発祥につながらないことが面白いところで、これはまた、かねてから議論のあるところだが、本稿では紙面の都合もある、これには触れないで話を進めよう。

ピラミッドの謎

エジプト観光の目玉は何といってもギザのピラミッドだ。かの和辻哲郎でさえ見物に出掛けて難解なる哲学を「風土」に展開し、後々の学生たちを悩ませている。ナイルのほとりに築造されたピラミッドは数多いが、その最大のものがここのクフ王のピラミッドで、もちろん私達もお参りした。しかし、この構造物は直下に立っても意外なほどに迫力を感じさせない。あまりにも広大平坦な砂漠に飲み込まれてしまうのである。どうも観光ポスターの方に分があるなどと軽口を叩きながら、しかし、しっかりと4千5百年の歴史を撫でまわしてきた。このピラミッドはよく知られているように、高さ約147メートル、基底の一辺が約230メートルの巨大な波消しブロックの形をしている。一個平均2.5トンの石材を、なんと275万個も積み上げたものである。クレーンどころか車輪すら存在しない時代での工事である。

ところで、このピラミッドはどういう目的で建造されたのか。これを巡って昔からいろいろな説がある。一番に有力なのは「王様の墓説」である。エジプトにはピラミッドが砂に埋もれているものも含めて80もあるという。このすべてが墓として建てられたことがはっきりしているともいう。しかし実のところ、この説は最も無難な説というに過ぎない。例えば、このクフ王のピラミッドの胎内にある玄室（遺体ミイラの安置場所）とされる空間は、ろくろく装飾もない小部屋である。小さな石の棺、しかも蓋さえないものがポツンと置かれているだけだ。なんだ、こんなものか、と期待はずれて驚くほどだ。有名なツタンカーメンの黄金のマスクが発見された王墓はピラミッドではなく地下に秘かに作られた墓であり、その玄室の埋葬品は現在カイロ博物館に展示されてコレクションの華麗さにたまげさせられる。ここには王の名前まではっきりした石棺が幾つかある。いずれも王の功績などを彫刻してそれ自体が一つの見事な芸術作品である。そして、この作品は一回り大きな

石棺に入れて隙間に木炭などの乾燥剤を詰めてある。そしてさらに、これをもっと大きな石の棺に納めて乾燥剤を詰める。こういうことを繰り返して結局、永久保存を目的とした王のミイラは７重の石棺で覆われている。縦・横・高さとも３メートルを越す巨大なものだ。これに比べればクフ王のピラミッドの石棺はあまりにもみすぼらしい。古代エジプトの最も偉大な王とされたクフ王のものとしては説得力に欠ける、眉睡である。では王墓説のほかにどんな説があるかというと、これが大変なことだ。まず天文台説。玄室への通路は26度の下降角度で、方角は真北を向いてぴたり北極星を指している。ここから天体観測のための建造物だという説。しかし、天体観測にこの大袈裟なものを何故かず多く作るのかという疑問は残るし、観測の記録も残っていない。つぎに食糧倉庫説。飢餓、洪水のための食糧を貯蔵したのである。支配者の務めだ。しかし、それにしては内部の空間が小さすぎる。ほかには人類の生存を後代に示すタイム・カプセルとか、UFOの着陸目標とかもあるが、いがれも迫力はない。

また、ピラミッドは、さまざまな数学的な謎をもつとされる。たとえば、ピラミッドの高さを10の９乗倍すると地球と太陽の距離に等しい。その底部の４辺の長さの合計を高さの２倍で割ると円周率パイの値になる。古代エジプト人がパイの値を知っていたとすれば、ギリシャでのパイの発見より２千５百年も早いことになる。また地球の総重量のピッタリ１千兆分の１がピラミッドの重量に当たる。さらにピラミッドの設計・測量の単位「聖キュビト」は、１キュビトが地球の半径の正確な１千万分の１で我々のメートル単位と値打ちに変わりが無い、などである。

古代エジプト文明の象徴的存在としてのピラミッドは、かくして砂漠の夢、メルヘンの原点となってセピア一色の砂漠に立っているのである。

クフ王のピラミッドの周辺は乾いたシルト、粘土でたいへん歩きづらい。あたりは観光客のざわめき、土産物を売る大人やバク・シーシ（喜捨）をねだる裸足の子供達の声などの喧噪が照り返す砂漠にひろがっている。

余談だが、ここで私もラクダに乗って旅の恥を掻いてきた。タクシーと同様、乗る前にチャンと料金を決めろと教わったから、しばらく交渉して御一人様１ドルに値切った。125円ほどだ。これはうまくいった、サテと乗ろうとしたらマダムも一緒にプリーズと勧めるから女房も一緒に乗る。夫婦そろって一世一代の晴れ姿、ピラミッドをバックに写

謎秘めて黯いピラミッド

真をとり、絶景を楽しんで少しは砂漠のあちこちを散歩もした。ラクダの乗り心地といえば、これは一足ごとに前後左右に大きく揺れて船酔いを起こしそう、とても金の鞍の王子様という気分ではない。ラクダが砂漠の船と呼ばれるのは、まずこの揺れからかと悟った。で、ひととき乗って、降りて、サテ料金を払おうとしたら、このラクダ屋、なんと２人で11ドルだと言い張る。それはもう身振り手振りの大パフォーマンスで喚き立てる。人だかりする始末だ。衆人環視の中だから、ここで負けては日本男子の沽券にかかわる、２人だから２ドルと頑張って、ともかく法と正義を貫いた。ここはエジプトである、砂漠といえども船に海賊はつきもの、よい勉強をさせられた。

砂漠のメルヘン　パート２

最近、ピラミッドはナイルの治水のために築造されたものだという説が発表された。メルヘンついでに、これを紹介したい。

まずは、カイロ付近のピラミッドの位置図を見て戴きたい。筑波大の高津教授、専門はグラフィック・デザインだが、教授はこの位置図などから、ピラミッドはナイルの治水機能を受け持つ構築物に間違いないと力説する。

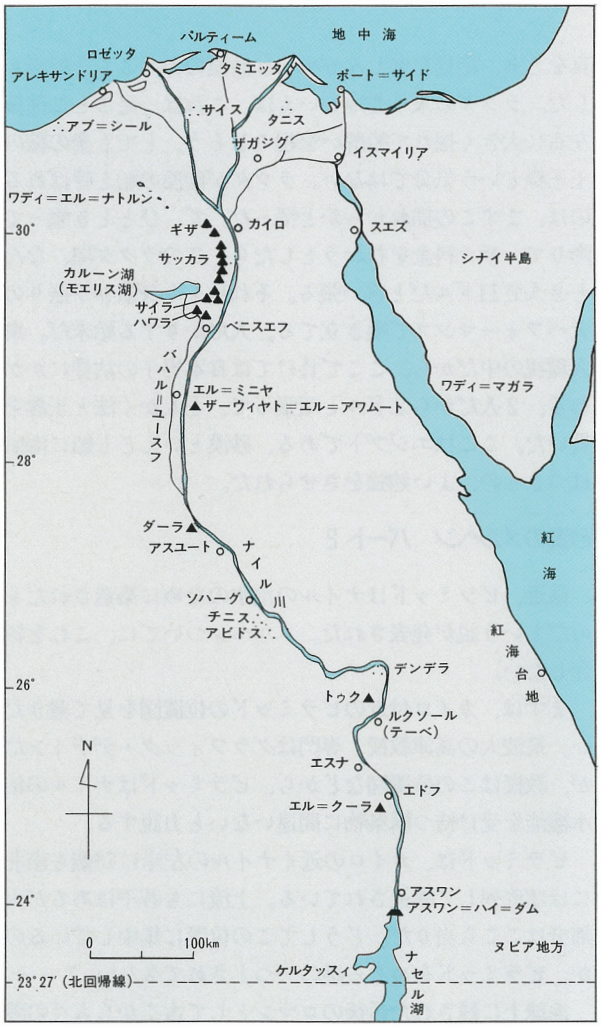
ピラミッドは、カイロの近くナイルの左岸に78個も南北にほぼ直列して建造されている。上流にも若干はあるが大部分はここら当りだ。どうしてこの位置に集中しているのか、ピラミッドをめぐる謎の一つとされて久しい。

地球上に残された最後のロマンとして古くから人々の夢をかきたてるピラミッド、しかし、これを建造した古代エジプトの王は、単に夢を求め幻想につかれて膨大な人力資

金を投じ、長期間の努力を重ねたとは考えられない。夢なら時間がたてば覚める。クフ王のピラミッド一つだけでも築造に20年を費やしている、決して一時の狂気が駆り立てたものではない。長期間の継続した強い意志が78個を築造させたに間違いない。

建造の位置は、繰り返すが、ナイルの左岸に集中し、ナイルはここで掘込河道が終わってデルタを流れる。上流のアスワン・ハイ・ダムによって現在は氾濫といえるものは見られないが、かっては、やさしい洪水はデルタの農地に恵みをもたらし、エジプト一国だけでなく近隣地中海沿岸

エジプト主要図



諸国の穀倉地帯を形成していた。さすれば神の怒りにも似た破壊的な氾濫は甚大な影響をこれらの国々にまで及ぼした筈である。掘込河道からデルタ地帯に流れ出た洪水は気侭に左に流れ右に振れる。洪水氾濫も、ある程度の振幅は差し支えない。が、平水時に戻った時に水量の多くが左岸の砂漠に向かうようになっては右岸の農地は旱魃を起こすたちまち砂漠に戻る。となると人の手の５本の指のような派川の広がりを一定の幅に維持制御することが古代エジプト河川技術者の目標であったに違いない。

何故に流れは屈曲蛇行するのかなどはヒマ人の戯言。ナイルの流路を、すくなくともデルタの左岸を越えて振れさせないための壮大な事業が必要になる。なにしろ左岸は渺茫たるサワラ砂漠である。ここへ分流して水量の大半を消費しては豊饒の農地に水飢餓がおこる。洪水も氾濫もデルタの大枠に納めておく必要があるのだ。これは天下を制する王の断固たる意志である。

中国に「愚公　山を移す」という故事ことわざがある。そもそもは黄河の下流に高さ万仞という山があり、愚公(愚人の意) 九十歳にしてこの山を平らげ、万人の幸せのため道路を通すことを思い立つ。自分が死んでも子供、そして孫がと続ければ山は必ず低くなる。削って生ずる土は渤海に投げるとして一家一族総動員でやり始めた。始め呆れた天帝もついにはその覚悟に感じて山を移したという。ピラミッドはエジプト古代王朝の「愚公の山」かもしれない。人々は蟻が運ぶようにして、神への祈りを唱えながら砂漠に石を積み上げたのであろう、目標が明確だったからやり遂げたのである。

ピラミッドがナイルの洪水対策、治水のための構造物だという新しい説、これも砂漠のメルヘンかも知れない。だが、連なって点在するピラミッドの姿は水制や霞堤あるいは離岸堤の知恵に似ている。穀倉地帯デルタの喉首に一列に築造されたピラミッドを眺めれば、河川技術者でなくとも、いままでのピラミッドの謎に挑む考古学者の知見とは切り口を違えた新鮮なメルヘンの予感に身震いを感ずるのではないか。河川関係者のどなたかが専門的な目で４～５千年前の地形図を再現し「新・河川考古学」を構築しないものか。そして月の砂漠のメルヘンを楽しむ人が現れないものか。